イエジー・スコリモフスキ 監督・脚本
『イレブン・ミニッツ』
11MINUTES A JERZY SKOLIMOWSKI FILM
2015 年/カラー/ポーランド、アイルランド/81 分/デジタル

トーク： 坂尻昌平 氏 （映画研究者）

◯スタッフ

監督・脚本： イエジー・スコリモフスキ
撮影監督： ミコワイ・ウェプコスキ PSC
音楽： パヴェウ・ムィキェティン
挿入歌「オ・マトゥコ」トマシュ・オルガネク
編集： アグニシェンカ・グリンスカ PSM
録音： ラドスワフ・オフニョ
美術監督： ヨアンナ・カチンスカ、ヴォイチェフ・ジョガワ
衣装： カリナ・ラフ
メイク： アンナ・ノーベル=ノビェルスカ
プロダクション・マネージャー： アンジェイ・ステンポフスキ、ダリウシュ・クウォドフスキ
VFX： アルバーニア・スタジオ、プラティジェ・イメージ
プロデューサー： エヴァ・ピャスコフスカ、イエジー・スコリモフスキ
製作総指揮： ジェレミー・トーマス(イギリスの映画プロデューサー)、アンドリュー・ロウ、エド・ギニー、アイリーン・タスカ、マレク・ジドヴィチ

◯キャスト

映画監督： リチャード・ドーマー
夫： ヴォイチェフ・メツファルドフスキ
妻： パウリナ・ハプコ
ホットドッグ屋の主人： アンジェイ・ヒラ
バイクの男： ダヴィッド・オクロドニク
登山家(女)： アガタ・ブゼク
登山家(男)： ピョトル・グウォヴァッキ
医者： アンナ・マリア・ブチェック
画家： ヤン・ノヴィツキ
少年： ウカシュ・シコラ
犬を連れた女： イフィ・ウデ
犬： ブフォン(スコリモフスキ自身が飼っている愛犬)
元ボーイフレンド： マテウシュ・コシチュキェヴィチ
産気づいた女： グラジナ・ブウェンツカ=コルスカ
瀕死の男： ヤヌシュ・ハビョル

イエジー・スコリモフスキ(監督・脚本・製作)

1938 年 5 月 5 日ポーランド・ウッチ生まれ。エンジニアの父と教師として働いていた母は第二次世界大戦中レジスタンスに身を投じ、父はナチスの強制収容所に送られガス室で処

刑される。

ワルシャワ大学史学部で民族誌を学ぶ。同時に詩作とボクシングに夢中になる。また、ジャズにも魅了され、ジャズピアニスト兼作曲家クシシュトフ・コメダのグループに参加、照明助手、ドラムを務める。

59 年、アンジェイ・ワイダと知り合い『夜の終わりに』(1960)の脚本を共同執筆、同作に若いボクサー役で出演もする。同時に、ワイダの勧めでウッチ映画大学に入学。ポランスキと知り合い『水の中のナイフ』の共同脚本を執筆。教師のアンジェイ・ムンクと親しくなり、ムンクの『エロイカ』(1958)に参加。1964 年『身分証明書』で自ら主人公アンジェイ・レシュチツ役を演じ、映画監督デビュー。以後、『不戦勝』(1965)、『手を挙げろ！』(1967)と監督・主演する。『手を挙げろ！』が上映中止となり、ベルギーで初の外国語映画『出発』(1967)を撮り、ベルリン映画祭金熊賞受賞。イギリス映画『早春』(1970)は、今日スコリモフスキの最高傑作と呼ばれる。1991 年の『30 ドア 鍵』以後、画業に専念する。17 年ぶりに『アンナと過ごした 4 日間』(2008)で映画監督業に復帰。他に俳優業でも活躍、テイラー・ハックフォード『ホワイトナイツ/白夜』(1985)、『ビッグ・ショット』(1987)、ティム・バートン『マーズ・アタック！』(1996)、ジュリアン・シュナーベル『夜になるまえに』(2001)、デイヴィッド・クローネンバーグ『イースタン・プロミス』(2007)、『アベンジャーズ』(2012)等に出演。

----------監督作品(長編劇映画)----------

1964 年　身分証明書 Rysopis
1965 年　不戦勝 Walkower
1966 年　バリエラ Bariera(1980 年代に自主上映)、音楽：クシシュトフ・コメダ
1967 年　手を挙げろ！ Ręce do góry、音楽：コメダ
　　出発 Le départ (日本公開 1999 年)、音楽：コメダ
1970 年　ジェラールの冒険 The Adventures of Gerard (「勇将ジェラールの冒険」アーサー・コナン・ドイル原作、TV 放映のみ)
　　早春 Deep End (日本公開 1972 年)
1972 年　キング、クイーンそしてジャック King, Queen, Knave (ウラジミール・ナボコフ原作)
1978 年　シャウト/さまよえる幻響 The Shout (ビデオ、DVD のみ、原作はロバート・グレイヴズの短編小説「叫び」(『現代イギリス幻想小説』白水社 所収))
1982 年　ムーンライティング(不法労働) Moonlighting
1984 年　成功は最高の復讐 Success is the best revenge
1985 年　ライトシップ The Lightship (日本公開 1985 年)
1989 年　春の水 Torrents of Spring
1991 年　30 ドア 鍵 30 Door Key
2008 年　アンナと過ごした 4 日間 Cztery noce z Anna (日本公開 2009 年)
2010 年　エッセンシャル・キリング Essential Killing (日本公開 2011 年)※
2015 年　イレブン・ミニッツ 11 minutes (日本公開 2016 年)※
2022 年　EO イーオー IO (日本公開 2023 年)※
　　※音楽：三本ともパヴェウ・ムイキェティン

◇監督の言葉

「われわれは薄氷のうえを歩いている。奈落の縁を歩いている。あらゆる曲がり角に不測の事態、想像を絶する事態が潜んでいる。未来はわれわれの想像力のなかにしかない。確か

なことなど何ひとつとしてない――次の一日、次の一時間、次の一分間でさえも、不確かだ。まったく予期せぬかたちですべてが不意に終わってしまうかもしれないのだ」

「『イレブン・ミニッツ』は主にワルシャワで撮影した。加えてダブリンのスタジオで一週間、クラクフ近郊のアルヴェルニア・スタジオで一週間撮影している。あくまでも実際的な考え方に基づいて、撮影場所を選ぶのが常だった。ワルシャワの撮影地に関しては、この街にあるありとあらゆる広場を考慮に入れた。結局完成作で描かれている通り、撮影地にはグジボフスキ広場を選んだ。というのも、この広場においては古きものと新しきもの、秩序と混沌、美しさと醜さがいちばん不調和な対照をなしていたからだ。広場自体、いやそれどころか街も名指されることはない。(そして、そうすべき理由はひとつとしてない)のだが、この撮影地がなんとかして粗削りでダイナミックな十字路体験をもたらしてくれればと思っている。あらゆる曲がり角に予期せぬできごとが潜んでいる十字路だ」(『イレブン・ミニッツ』パンフレットから)

----------作品構造----------

- 製作について：ダブリンのスタジオで一週間、クラクフ近郊のアルヴェルニア・スタジオで一週間、あとは、ワルシャワで撮影、40 日間ですべての撮影を終了
- これから活動する何人かの人物が、最初に、iPhone、ウェブカム、監視カメラで撮られた映像ではじまる。いたるところで、人々や事物の出来事を記録するデジタル映像
- 午後 5 時 00 分～11 分までのワルシャワ中心街での出来事、破局へと至る約 20 人
- 何度も時間を巻き戻しながら複数の人物の視点から描出する。時間のまき直しを、視点ショットを変えて何度も繰り返す

□参考作品１

★黒澤明『羅生門』(1950)以後、アルフ・シェーベルイ『令嬢ジュリー』(1951)、アラン・レネ『去年マリエンバートで』(1961)、キューブリック『現金に体を張れ』(1956)、ジム・ジャームッシュ『ミステリー・トレイン』(1989)、クエンティン・タランティーノ『パルプ・フィクション』(1994)等々

- 群像劇：複数の人物がそれぞれの人生/物語を歩み、やがてそれらが蝟集し、収斂して最終局面を迎える劇構造

□参考作品２

★D.W.グリフィス『イントレランス』(1916)、4 つの不寛容のエピソード(「キリストの受難のユダヤ篇」「ペルシャに滅ぼされるバビロン篇」「サン・バルテルミーの虐殺のフランス篇」「青年が無実の罪で死刑宣告を受ける、「母と法律」のアメリカ篇」)が、交互に描かれ、最終局面に向かって加速してゆく

★ジャン・ルノワール『ゲームの規則』(1939)：貴族階級と使用人の労働者階級の葛藤と第二次世界大戦前の不安な世相と階級社会の終わりを喜劇と悲劇が決定不能なまま、悲喜劇(tragicomedy)として描く

★ジャック・タチ『プレイタイム』(1967)：高層ビルでのユロ氏の面接から、ビルの中の迷路に迷い込み、やがて高級レストランでの富裕層・労働者階級入り乱れての大パーティへとなだれ込む。こまごまとした人物が特に強調されることなく繰り返し現れ、人物や事物の壮大なメリーゴーランドと化す

★ロバート・アルトマン『ナッシュビル』(1975)、『ウエディング』(1978)、『ザ・プレイヤー』(1992)、『ショート・カッツ』(1993)、『プレタポルテ』(1994)：複数の人物が相互に無関係に活動しているのだが、偶然、交点ができ、網の目状に広がってゆく

- 5 時 00 分～05 分　時計塔の鐘の音が 5 時(5 回鳴る)、それが別の場面でもう一度鳴る

- 5 時 05 分～10 分　市街上空を横切る旅客機の轟音
- 全部で 5 回、反復される
- 不吉さの象徴としての鐘の音、低空飛行する旅客機とその轟音：何かが起こりそうな予感、予兆
- 「ヘルマンの腕時計が 5 時 10 分を指し「5 時 10 分だ」と告げる。ホットドッグ売りの父を配送業者の青年がバイクの後部座席に跨らせてのち、事態は急転する。以後の一分間で映画内の「時間」はジグザグの往還運動をやめ、これまでに登場した人物たちはみな一点へと吸い寄せられるようにして破局の現場へ集合し、彼らは不可逆的な時間の奔流、すなわち死へと呑み込まれることになるのである」(遠山純生「虚空に穿たれた“詩的メタファー”」)
- 窓から侵入した白い鳩が、ベッドの上を超えて三面鏡に衝突して、鏡にひびが入る場面。のちの場面でも、アングルを変えて同じ出来事が反復される
- 画面上の黒い点：監視するモニター画面の右上に黒い点が映っている。画家の初老の男の描く絵の右上に黒い点となる絵具を垂らしてしまう
- 最後の多重交通事故の映像が、監視カメラのモニター画面になり、やがてそれが、無数に並ぶモニター画面の一つの黒い点=しみになってしまうところで終わる
- 公園で膨らみ、やがてはじけてしまうシャボン玉⇒象徴的意味を持とうとするもすぐにはじけてしまう、揺らぎやすさ、偶然のたわむれ
- 最後の場面、妻アニャと会っている映画監督のマンションで、乱入した夫ヘルマンが転んでしまい、妻と映画監督をその手に宙吊りにしてしまう。ポルノ映画をノートパソコンで観ていた登山家カップルの片割れの男がゴンドラの上で壁を修理しているところへ、映画監督が落ち、共に落下し、夫が必死の形相で繋ぎ止めていた妻も落下してゆく。落下のイメージは、画家の老人がポニャトフスキエゴ橋から、スタントマンがヴィスワ川に落下する場面で予兆としてある

□参考作品３

★ヒッチコック『逃走迷路』(1942)、『裏窓』(1954)、『北北西に進路を取れ』(1959)等、ぶら下がる者と支える者が、落下の恐怖に抗いつつも、最後に手を離すことになる。

- 相互に無関係の人物たちの出来事が、無関係のまま、画面の中で交錯しつつも、最終局面においてそれらは蝟集し、時間のパズルと化していた 10 分間の出来事が、カタストロフィを迎える。そしてそれは、監視カメラの無数の映像の中の黒い点=しみへと収斂してゆく。それは、まさに傑作『早春』の原題「Deep End」(プールの深いところという意味から困難な状況、窮地を意味する言葉)である。また、映し出されている映像にもそれを映し出している映像があるというメタ・レヴェルを示唆するものでもある。それは、ベルギーで撮った『出発』の最後でジャン=ピエール・レオの静止画像が燃えてフィルムそのものの焼失=消失へと至る画面を想起させる。映っているものが、フィルムという物質に過ぎないことを示唆するこの場面は、同時に彼の人生の「Deep End」であり、そこからの「出発」(Le depart)であろう。この『イレブン・ミニッツ』の結末も、一つの画面の外にも無数の画面があるのだという究極の相対化を行いつつ、同時に絶対的な人生の不可逆性をも示唆しているのではないか、それが最後に示される小さな黒い点=しみではないだろうか？

＜参考文献＞

- 『イレブン・ミニッツ』パンフレット、2016
- 遠山純生編『イエジー・スコリモフスキ』紀伊國屋映画叢書１、2010
- 遠山純生編・著『イエジー・スコリモフスキ読本:「亡命」作家 43 年の軌跡』boid、2014